

M & A 専門誌

Mergers & Acquisitions
Research Report

MARR マール

2008 March 3月号

発行人 高橋 豊
Yutaka Takahashi

編集長 川端 久雄
Hisao Kawabata

制作進行 加藤 順子
Junko Kato

表紙写真 十文字 美信
Bishin Jumonji

アート
ディレクション 石崎 路浩
Michihiro Ishizaki

デザイン 斎藤 圭太
Keita Saito

本文写真 福本 敏雄
Toshio Fukumoto

印刷 三松堂印刷株式会社

発行所：株式会社レコフ

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-1-1

麹町ダイヤモンドビル

TEL.03-3221-4942

2008年3月1日発行 通巻161号

雑誌18321-03

定価2,310円 本体2,200円

RECOF

編集室から

BOOK

『資本主義の多様性—比較優位の制度的基礎』

ピーター・A・ホール、デヴィッド・ソスキス編

遠山弘徳、我孫子誠男ら訳

ナカニシヤ出版 3500円(本体)



ITの技術革新とグローバリゼーションの波が地球をのみ込んでいる。各国の政治経済の根本的相違は、今後も存続するのか。それとも、統合していくのか。新古典派経済学的な見方では、各国の市場経済はやがて一つの共通モデルへと収斂するという。

これに対し真っ向から対立する見解を提示し、資本主義の多様性の概念を打ち出したのが本書である。各国の政治経済は、それぞれ独自の制度的枠組みの下で、国ごとに異なった資本主義形態を生み出し、こうした複数のモデルが比較優位をもつことを明らかにした。

編者らは、企業を分析の中心に置く。企業は活動をするうえで資金、労働者、取引先をめぐる様々な問題を調整（コーディネート）しなければならない。それを上手く処理し、企業がそれぞれのコンピタンスを展開することで、その国の経済全体が上向くのである。

コーディネーション問題の解決には、二つのタイプがある。市場に依存する程度が大きい「自由な市場経済」と、その程度は小さく非市場的な協力関係を重視する「コーディネートされた市場経済」である。英米などアングロサクソン諸国は前者に、ヨーロッパ大陸の多くの国々や日本は後者に分類される。一口に資本主義といっても市場経済の形は異なる。どちらもが比較優位をもち、今後も共存していくというのである。

その理論的根拠が詳細に述べられている。編者らは各国の諸制度、特に教育訓練制度、労働市場制度、コーポレートガバナンスの仕組み、企業間の関係の4つを取り出す。企業はこの中に埋め込まれていて、それぞれが比較優位をもち、これを比較制度優位と呼ぶ。

自由な市場経済の国々の特徴は、高度な一般的技能をもつ人たちの厚い層、フレキシブルな労働移動、短期的な収益性の重視、企業買収の容易さ、ドライな企業間関係である。企業は人材を引き抜いたり、企業を買収したりして、新しい技術を容易に獲得できる。従って、半導体、バイオ、ソフトなどのラジカルな製品のイノベーションに強みをもつ。

これに対し、コーディネートされた市場経済の国々の特徴は、ある企業や産業に限定された特殊的技能をもつ労働者の長期雇用、手厚い社会保護、忍耐強い資本、稠密な企業間ネットワークである。生産プロセスの絶えざる改善といった漸進的なイノベーションが得意で、自動車やエレクトロニクス製品といった多品種大量生産に強み、比較優位をもつ。

原書は2001年に出版され、大きな反響を呼んだ。今回の翻訳に当たり、編者の序文が寄せられている。日本はバブル崩壊後の15年に及ぶ経済危機の結果、資本主義にも現実に重要な変化が発生し、アングロサクソン型へ向かうと見られがちだが、「実質的にはコーディネートされており、政治経済の中核的要素は依然として変わらないまま」としている。

日本の戦後の資本主義を、護送船団資本主義という言葉でひと括りにして否定しがちだが、そんな単純なものでないことが分かる。長期不況を克服した今こそ、市場主義一辺倒でなく、資本主義の多様性を認め、真の日本型資本主義を再構築する時期に来ているのだと思う。日本のM&Aを考えるうえでも、日本独自の視点が大事なのだろう。(青)

編集後記

今月号に登場していただいたドツール・日レスHD会長の大林裕史さんとは、実は大学の教養学部時代の2年間、同じクラスで学んだ同級生です。当時、彼は着る物もあか抜けていて、見るからにブルジョア家庭の子弟。今の言葉でいえば、セレブです。つましいサラリーマン家庭に育った私にはまぶしい存在でした。

その後、進んだ学部は違い、交際もなく、卒業後は、彼が経営するレストランで開かれたクラス会で1回会った程度でした。今回、駆け足で彼の足跡をたどりました。大学のレッテルにしがみつかず、リスクを取り、細心に、ルールを遵守しながら歩んできた男。当時は、外見に反発して目も向けようとしなかった内面を、初めて知りました。人生も晩年を迎え、こうしてインタビューする側とされる側に分かれて再会できる。これも仕事をしているおかげと、感謝している次第です。(開)

本誌の記事およびデータの著作権は原則として株式会社レコフに帰属します。いかなる目的であれ当社に無断で本誌記事の複製、引用、転載等を行うことを禁じます。また、本誌記事の情報は、当社が信頼できると考える各方面から取得しておりますが、その内容の正確性、完全性が保証されているものではありません。当社は本誌記事に起因して被った損害については、その内容如何にかかわらず一切の責任を負いません。乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。マール室（03-3221-4942）までご連絡ください。